S1M NEWS

Oct. 2023 No. 24

SCHOLARONE MANUSCRIPTS™

■＜特集レポート＞ Journal Impact Factor（JIF）の取得にあたって（JARC誌 編集委員長インタビュー）
■Journal Impact Factor取得までのステップと維持向上のポイント
■＜S1M機能紹介＞ Log in Using Web of Science

日本大腸肛門病学会 英文誌
JOURNAL OF THE ANUS, RECTUM AND COLON

Journal Impact Factor の取得にあたって

今後の展望

現編集委員長 **石原 聡一郎**先生
東京大学医学部腫瘍外科 教授

構想と決断

初代編集委員長 **宮島 伸宜**先生
日本大腸肛門病学会理事長、医療法人恵仁会 松島病院 院長

2023年6月、日本大腸肛門病学会が発行する「Journal of the Anus, Rectum and Colon（JARC）」がJournal Impact Factor（JIF）を取得しました。今回、英文誌JARCを立ち上げた初代編集委員長である宮島 伸宜先生（現日本大腸肛門病学会理事長）と現編集委員長の石原 聡一郎先生に創刊当時の構想と今後の展望について伺いました。

英文誌JARCを立ち上げた初代編集委員長

JARCの創刊にあたって、ジャーナルの目的や最初の経緯をお願いします。

【宮島】まず学会の会員数を増やさないといけないという大前提があって、そうすると国際化は必須です。では英文誌はどうしているのかという話になり、当初大腸肛門病学会には、まだ学会自身の英文誌はなく、提携のジャーナル『Diseases of the Colon & Rectum』（DCR）だけでした。DCRに年に1回サプリメントとして載せているだけ。それではいけないだろうということで、英文誌をどうしても作りたいというのが最初の経緯です。国際情報発信というのがいちばん大事なところでした。

英文誌を立ち上げたいという考えがあって、杏林舎を選んだ理由は、どういったところが決め手になったのでしょうか。

【宮島】3社ぐらいと競合だったのですが、ポイントは理事たちにとってどの会社が“いちばん楽か”ということでした。杏林舎以外は当然すべてが英語でしたので、本当に困ったときに日本語で進められるかが決め手の一つであったのは間違いないです。

編集委員を選定する際にどのような点に重点を置きましたか。

【宮島】ゼロからでしたから、内科と外科と肛門科をまんべんなく考慮して、その中で業績があり、かつ英文論文を書いている先生方をセレクションしていった感じです。

編集委員も掲載論文も編集委員長が決断する

創刊当初、採択する論文の基準をどのように設定されましたか。

【宮島】採択率は、5割より高いところを目論んでいたのですが、私が編集委員長の時は3割ぐらいを設定しました。A+からC-という評価があって、どこまでを取るかは編集委員長の権限です。内容によっては書き直してもらいます。

査読者によってもいろいろな評価が出てきます。統一的な基準というのはなかなか難しかったりしますか。

【宮島】査読者が査読してきて、編集委員に行って、最終的に編集委員長に来るわけです。担当編集委員に論文を差し戻したこともありますが、それによって担当編集委員と編集委員長で評価基準の統一を図っていくということが重要です。過去にはエディターキックが頻発していたこともありました。依頼論文で1号固めたこともありました。

掲載料を無料にできた経緯

掲載料の金額設定の経緯についてお聞かせ下さい。

【宮島】JIFのない新規ジャーナルに投稿してもらえるように、掲載料を無料にしたい想いがありました。杏林舎さんから科学研究費（科研費）申請の提案もあり、科研費を取れたおかげで掲載料無料を実現することができました。

科研費についてお聞きしますけれど、日本学術振興会と面談があったと思いますが、何か印象に残ったことはありますか。

【宮島】「DCRがあるのに、なぜわざわざ日本から英文誌を出す必要がありますか」という質問を受けたのは覚えています。「むしろ、日本の大腸肛門病学を日本から発信しないでどうするのか。日本発のデータを世界へ出すべきだ」と強く語りました。

そのほかに、創刊する際に大変だったことはありますか。

【宮島】うまくいかなかったことは、杏林舎さんのおかげであまりなかったです（笑）。すごくうまく進みました。いろいろひな形を作ってもらって、ScholarOne Manuscripts™のシミュレーションをし、投稿・査読フローがスムーズにいくか判定して…。2016年春先に理事会で決定され、2017年1月に創刊です。このスピード感と理想の実現は杏林舎さんでないとできなかったと思います。

これからのJARCについて

前編集委員長としてJIFを維持していくため、発展に導くため、どのような方策があるでしょうか。…Webに続く

JIF取得！ 現編集委員長がJARCについて語る

石原先生が編集委員長に就任された際に目標として掲げられたものはありますか。

【石原】いくつかありました。宮島先生が始められて、PubMedに載って、オープンアクセスジャーナルとして維持していきたいと思いました。また当初から明確な目標としてJIFを取るというのがありましたので、どうしたら取れるか考えました。それから、今もそうですけれども年間4号と規模はまだ小さいので、発行回数を増やして発展できるようにと思っています。

初代の編集委員長から引き継がれた形になりますが、ジャーナルのレベルや採択する論文のラインで何か意識されていることはありますか。

【石原】JARCには、編集委員長になる前から論文を投稿して、掲載してもらっていましたから、大体どういった感じのものが載っているかはわかっていました。ジャーナルの趣旨が日本から大腸肛門病の情報発信を促進するというものなので、掲載論文のラインといいますと、当たり前ですが、まず科学論文としてちゃんとしているということです。内容はもちろん重要です。臨床や研究に役立つとは、つまり別の論文に引用される可能性があるということです。メッセージや新しさなどが必要ですね。そういう質が保たれていれば、いたずらに採択率を下げないで、ジャーナルのキャパシティが許す範囲で、みんなに投稿して読んでもらうということが大事だと思っています。現状、採択率は50％前後で安定しています。

JARCの採択率は50％がある程度の基準とのことですが、いい論文が増えていく中で、審査基準を少し変えようと考えられたことはありますか。

【石原】採択率というのは結果として出るものです。査読者あるいは編集委員が論文を採択するかはその人の主観が強く、だいたい5割ぐらいを取ろうとか、そういうふうにそもそも考えてはいません。読んでちゃんとした論文か、メッセージがあるのか、新しいことがあるのか、それが研究などに役立つかというところで決めていると思います。その結果が5割ぐらいになっていると。採択率というのは、そのジャーナルに送られてくる論文の全体のレベルによると思います。

海外へもっとアピールしていきたい

ジャーナルの周知方法として、どういったものが効果的だったでしょうか。

【石原】大腸肛門病学 …Webに続く

続きはWebで

紙面の都合上、掲載しきれなかったインタビューの続き（全文）をWebにて公開しています。ジャーナル運営の今後についてや、海外へのアピール（周知方法）など、ジャーナル運営のヒントになる情報満載です！ ぜひ以下より続きをお読みください。

杏林舎

https://www.kyorin.co.jp/

KYORINSHA www.kyorin.co.jp/

Journal Impact Factor（JIF）取得までのステップと維持向上のポイント

今号でのJournal of the Anus, Rectum and Colon（JARC）編集委員長へのインタビューからもわかりますように、JARCは創刊構想の時点でかなり明確なジャーナルのビジョンがありました。PMC収載やJournal Impact Factor（JIF）取得という目的が創刊構想の当初より明確であったため、その目的を視野に入れて雑誌づくりをすることができ、その結果として遠回りせずに最短の道のりでJIFを取得することができました。
ここでは、そのJIF取得までの理想的なステップをご紹介します。
JIFの取得に必要な要素とJIFの維持向上に求められる要素は大部分が共通していますので、すでにJIFを取得しているジャーナルにとっても有用な情報になるかと思います。
ジャーナルの創刊からその発展までは、大きく分けて以下の4つのPhaseに分けることができます。

Phase1 創刊構想から創刊まで
Phase2 PMC収載
Phase3 JIF獲得
Phase4 JIFの向上と領域内でのJIFランク向上

このうち、Phase1 ～ Phase3がJIF取得までのステップとなります。
取得後のステップとなるPhase4につきましては、また別の機会にご紹介させていただきます。

I. Phase1（創刊構想から創刊まで）

i. 創刊構想とスケジュール

繰り返しとなりますが、JIFの取得や、PMC・MEDLINEに最短で収載されるには、創刊の時からこれらを意識したジャーナルづくりをすることが重要です。
ジャーナルの名称から編集委員の選出方法、ジャーナルのAim and Scopeの設定、投稿規程、査読や倫理規程の策定、更には海外の編集者の招聘など、創刊に必要とされるすべての要素をリストアップし、それらのすべてを国際的なガイドラインに沿う形でデザインする必要があります。
これらをデザインした創刊計画を遅滞なく実現させるためにはスケジュールの管理も重要です。創刊に必要なすべての工程をさらに細分化し、実行可能なスケジュールに落とし込み、漏らすことなく進めることができないと、想像以上に創刊が遅れることとなります。また創刊準備段階で編集委員会や理事会の体制、または創刊・出版方針に変更が生じますと、計画自体がとん挫してしまう可能性も高まります。ジャーナル創刊には、明確な方針、それを推し進めるしっかりとしたスケジュール管理のもとでスピーディに遂行されることが不可欠となります。

ii. 投稿査読プロセスの設計

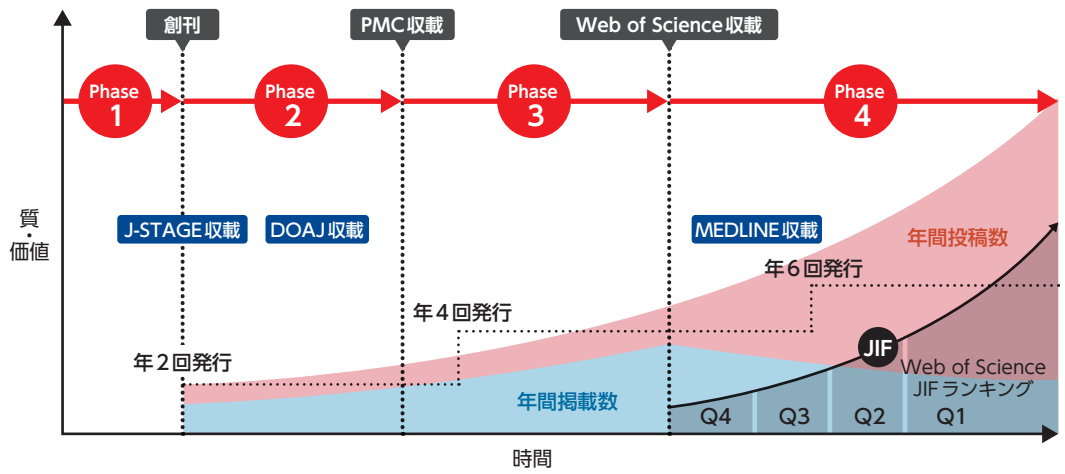
独自に行った調査によると、投稿された論文は初回受付の時点において平均で2.5回、原稿不備により差し戻されています。これは投稿時点でほとんどの論文が投稿規程に準じて作成されていないことを意味しています。長くて複雑な投稿規程を読み解き、規程を満たす論文を個人で準備することは、論文執筆になれた著者にとっても容易ではなく大きな負担となります。それが著者の投稿意欲を低下させることにつながり、また、差戻し回数が増えることで編集事務担当者の負担も増大します。
査読期間を短縮し、創刊当初から安定した投稿を確保するには、このプロセスをなるべくシンプルでわかりやすくし、差戻しをしなくて済むような投稿プロセスを設計しなければなりません。
また、投稿プロセスだけでなく、審査プロセスも最適化されていないと、ジャーナルポリシーが誌面に反映されず、結果として多くの問題を引き起こすことになります。

審査工程が最適化されていないことによる弊害

1. 査読期間が長期化し、投稿から採用・公開までに長い時間がかかり、結果として著者の投稿インセンティブを低下させ、投稿数が減少する。
2. 投稿規程に沿った一貫した投稿受付チェック体制が整っていないことで投稿規程に準拠した論文が掲載されない。これは国際的なデータベースの収載審査および収載維持審査における不採用理由になる。
3. 評価基準が査読者、編集委員の間で共有・統一できていないため、掲載論文の質が安定せず、ジャーナルの評価が上がらない。
4. 非効率的な審査フローにより事務局、査読者および編集委員の負担が増大する。

個々のジャーナルの性格によって最適な審査工程は異なるため、一概に「こうあるべき」と言い切れるものではありませんが、この工程の最適化に成功すると、新規創刊ジャーナルに限らず、国際的なデータベースへの収載審査の通過や収載維持、JIFなどの各種メトリクスの向上へとつながっていきます。審査工程の最適化は、編集委員や編集事務局の積極的な関与が不可欠なため、ジャーナル運営のなかで最も難しい課題のひとつです。
国際基準に準拠したジャーナルの骨組みを作り、それに即した投稿受付体制及び審査工程を構築して初めて、国際誌として世界に発信する土台ができあがるので、妥協せずに取り組んでいただきたいところです。

ジャーナルの成長ステージ



II. Phase2・3（PMC収載とJIF獲得まで）

このPhaseでは、創刊時にデザインしたジャーナルの土台をもとに継続的なPDCA（Plan・Do・Check・Act）サイクルを回していくことになります。
具体的には、下記のような項目に対してPDCAサイクルを実施していきます。

- **掲載論文の質の向上**
- **査読レベルの向上**
- **掲載論文数の増加**
- **発行回数の増加**
- **その他**（ポリシー、査読プロセス、制作プロセス、英文校閲、デザイン etc.）

このような検証と改善のサイクルを円滑に進めていくのに最も有用なのが、定期的なレポート作成と関係者間での共有です。
一言でレポートといっても、ジャーナル改善に必要なレポートの範囲は多岐にわたります。投稿査読状況のレポートから、自誌及びライバル誌の引用状況などを共有し、改善策を検討・実施します。なかでもライバル誌の出版状況に関する詳細なレポートは、ジャーナルの改善と質の向上に大きな効果をもたらします。このような改善のための仕組みが稼働していれば、自ずとJIFを取得できるレベルの雑誌に成長していくことになります。
ここまでをまとめると、JIF獲得までと維持向上のステップは、

1. 国際基準に沿ったジャーナルポリシーと体裁を整える
2. ジャーナルポリシーを誌面に反映させるための投稿査読プロセスを構築運営する
3. レポートを活用したPDCAサイクルを運用し、改善を継続する

の3つに尽きます。
すでにご存じの方も多いかと思いますが、JIFの申請ハードルが下がり、多くのジャーナルにとって申請がしやくなりました。しかし、同時にフラッグシップコレクションであるSCI収載ジャーナル（旧付与基準でJIFを付与されたジャーナル）とESCI収載ジャーナル（新しい付与基準で追加されたコレクションに収載されているジャーナル）が同じ単一のJIFで比較されることになったため、両コレクション間のジャーナルの入れ替わりが激しくなったり、ESCIからも除外されるジャーナルが増えたりと、これまで以上に競争が激しくなることが予想されます。
すでに成熟期にあるジャーナルも、本稿で解説したような点に着目して検証と改善を継続することが不可欠な時代になってきました。
杏林舎では、創刊からJIF獲得までにとどまることなく、これまでの運営の見直しや更にその先を目指すコンサルティングサポートをご用意しております。JIFの取得を目指すジャーナルに限らず、JIFの維持向上にお悩みのジャーナルでも、一度ジャーナルの状況を診断（ジャーナル診断）されてみるのはいかがでしょうか。

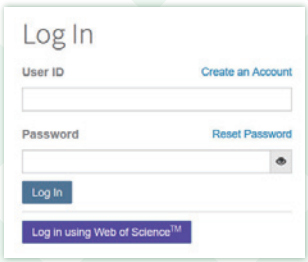
編集後記

今号は、本年度にJournal Impact Factor(JIF) を取得された日本大腸肛門病学会様の英文誌の初代編集委員長と現編集委員長にインタビューさせていただきましたのでその内容をご紹介しました。
明確なビジョンを持って、目標に辿り着くまでに必要なステップを1つずつ着実にクリアされていったこと、今後のジャーナルとしての質の維持・向上についてのお話をうかがうことができました。弊社としましても創刊の構想段階から携わらせていただき大変貴重な経験となりました。
宮島先生、石原先生、この度はお忙しい中、ご協力くださいまして誠に有難うございました。
インタビュー記事全文を紙面に収められませんでしたため、続きを弊社Webサイトに掲載しておりますのでそちらも是非ご覧ください。
また、S1Mのトップページに「Log in Using Web of Science」が表示されるようになりましたので、ご活用いただければと存じます。ご不明な点がございましたらScholarOneサポートセンターまでお問い合わせください。

S1M NEWS
2023年10月12日発行　第24号

発行　株式会社 杏林舎
〒114-0024 東京都北区西ケ原3-46-10
Tel.03-3910-4311　Fax.03-3949-0230
https://www.kyorin.co.jp/
編集・制作・デザイン　株式会社 杏林舎
E-mail　s1mnl@kyorin.co.jp

©株式会社 杏林舎　本誌掲載の記事・写真・イラストレーション等の無断転載を禁じます。

S1M 新機能のご紹介　Log in Using Web of Science

トップページに"Log in Using Web of Science"ボタンが表示されるようになりました。
このボタンは、すべてのScholarOne Manuscriptsサイトに表示されています。
このボタンを押し、手順にしたがって、S1MアカウントとWeb of Science（WoS）のアカウントを関連付けることで、WoSアカウントでもS1Mサイトにログインすることが出来るようになります。また、WoSアカウントとORCID IDのアカウントがリンクされていれば、ORCID IDでもログインすることができます。
WoSアカウントは無料でどなたでも作成することが出来ますが、WoSをご契約されている場合には、その全機能を利用することが出来ますが、ご契約されていない場合は研究者プロファイルのみがご利用いただけるようになっております。